

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2012年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院異文化コミュニケーション 研究科 異文化コミュニケーション 専攻		
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科・ 異文化コミュニケーション専攻・ 博士後期課程 4 年	山田悠介	印
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科 教授	野田研一	印
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
<b>研究課題名</b>	〈変身〉と擬人化：現代ネイチャーライティングにおける動物表象		
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科・ 異文化コミュニケーション専攻・ 博士後期課程 4 年	山田悠介	
<b>研究期間</b>	2012 年度		
<b>研究経費</b>	200 千円（実績額又は執行額）		

**研究の概要**（200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。）

本研究は、文学、文化人類学、歴史学をはじめとする人文科学系の学問において、動物と人間の〈変身〉という事象がいかに扱われてきたかをまとめるとともに、動物と人間の関係性をテーマとする日本およびアメリカの現代ネイチャーライティング作品を〈変身〉という切り口から分析し、動物と人間の「コミュニケーション」を論じる上で〈変身〉がいかに重要な概念となりうるかを考察したものである。研究の結果、近年の環境文学研究ないし動物論の文脈で議論される、動物の「他者性」の問題、動物表象や擬人化をめぐる問題を論じる際に、〈変身〉という概念を導入することが極めて有用であることが明らかになった。

**キーワード**（研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。）

[ 環境文学研究 ] [ 動物変身譚 ] [ 自然という他者 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

**1. 研究の目的と概要**

本研究は、環境文学研究において、動物と人間のあいだの〈変身〉という「コミュニケーション」に着目することが、自然と人間の関係性を考察する上でいかに有用であるかを明確にすることを目的としている。この研究課題を達成するため、本研究では、(1) 環境文学研究と隣接する分野における動物と人間の〈変身〉の問題を扱った先行研究をまとめ、(2) それらの知見が環境文学研究で論じられている問題系といかに接合しうるかを検討し、(3) 実際の文学テキスト(梨木香歩)の分析を通して、〈変身〉とは何かを問うとともに、〈変身〉に着目することの有用性と限界を明らかにするという手順を踏んだ。

先行研究のまとめに入る前に、環境文学研究における動物という主題の位置づけについて簡単に言及したい。1980年代後半の北米で研究が始められた、文学における自然と人間の関係に焦点を当てた環境文学研究においては、当然のことながら動物と人間の関係や動物表象をめぐる問題は主要なトピックの一つとして扱われている(たとえば、文学を専門としない研究者向けに環境文学研究やエコクリティシズム(環境批評)について概説することを目的として執筆された“Literature and Environment”(The Annual Review of Environment and Resources 第36号(2011年))でも、「動物」をテーマとするチャプターが設けられている(本論文は、L・ビュエル、U・ハイザ、K・ソーンバーという、現在の環境文学研究をリードする3名の研究者によって執筆され、最新の研究状況がまとめられている))。また、動物と人間のあいだの〈変身〉についても全く議論が行われていないわけではない。ただし、多くの場合、人間が動物に〈変身〉するというベクトルよりも、動物が人間に〈変身〉するというベクトルのほうに関心が向けられる傾向にあり、特に、動物を「擬人化」して表象することを人間中心主義的なふるまいであるとして批判的に捉え、そこからいかに脱却しつつ動物ないし自然を描きうるのかを模索することが、現在の環境文学研究の中心的な研究テーマとなっている(野田, 2010)。

本研究では、こうした状況を踏まえ、人間が動物に〈変身〉するというベクトルに主たる焦点を当て、人間が人間以外の存在に〈変身〉することの意味を考察した。

**2. 先行研究の整理および環境文学研究との接合**

本研究では、動物と人間の〈変身〉の問題を扱った先行研究を概観するため、まず、〈変身〉について総合的な研究がまとめられた書である、桜井・小野・山折・宮家(1974)を参照し、民俗学、思想史、心理学、文化人類学の領域で〈変身〉が研究されてきたことを確認した。ここでは、人間の一生における肉体的成長や社会的身分の変化なども広義の〈変身〉の一種として扱いながら、動物と人間のあいだの〈変身〉に主たる焦点を当て、人間の動物への〈変身〉が、神話や民話、小説など多様なジャンルのテキストのなかで語られてきたこと、そして、人狼信仰、遊び(物まね)、仮面、儀礼、トーテミズム、神話、錬金術など、じつにさまざまなテーマと関連してこれまでに研究が行われてきたことが詳述されている。〈変身〉研究の全体像を見定める上で非常に示唆的なこのテキストの知見を導きの糸に、本研究では、動物変身譚に関する研究と、動物の模倣に関する研究に焦点を絞り、先行研究の調査を行った(ここでは紙幅の関係上、特に重要な内容について報告する)。

まず、文学研究であるという点で環境文学研究ともっとも親和性のある、動物変身譚に関する先行研究を収集し、内容を検討していった。そのなかでも特に、中村禎里の『日本人の動物観：変身譚の歴史』ビイグ・ネット・プレス(2006[1984]年)と、篠田知和基『人狼変身譚——西欧の民話と文学から——』大修館書店(1994年)の2冊は、動物変身譚に関する総合研究として非常に示唆に富むものであった。前者は、日本の神話や昔話において人間がどのような動物に〈変身〉してきたか、その歴史の変遷をまとめるとともに、日本の変身譚とグリム童話における変身譚とを比較することを通して、西洋と日本の動物変身譚の相違や、それぞれの文化や時代、各テキストにおける〈変身〉の象徴的意味を明らかにしている。一方、後者は、主に西洋文学(神話、民話も含む)における〈変身〉、特に、題名にも挙げられている人狼信仰について詳細に記述されている。前近代のヨーロッパ(の一部)では、狼をはじめとする獣に〈変身〉することが通過儀礼としての役割を担っていたこと、また、「狼」とラベルを貼るという行為が、社会的マイノリティや離人症などの精神の病にかかった人をスポイルする機能を持っていたことが、豊富な資料をもとに論じられていた。なお、人狼・狼男伝説に関しては、セイバイン・ベアリング＝グールド『人狼伝説——変身と人食いの迷信について』人文書院(2009年)、池上俊一『狼男伝説』朝日新聞社(1992年)などにも詳しい。特に後者は、狼男と自然のイメージが西洋の自然観の変遷と互いに密接に関わり合っていることを歴史学的手法を用いて明らかにしている点で、環境歴史学の知見を積極的に取り入れようとしている環境文学研究にとっても、極めて有益な研究であると思われる。

次に、物まねや舞踊、仮面、儀礼など、動物を模倣するという〈変身〉について論じている研究分野について調査した。動物論の大家であるポール・シェパードの『動物論：思考と文化の起源について』どうぶつ社(1991年)や、教育学を専門とする矢野智司の『動物絵本をめぐる冒険：動物—人間学のレッスン』勁草書房(2002年)がこの問題を扱った重要文献として挙げられる。両者に共通するのは、動物を模倣することを、動物と人間の類似性を認識す

### 研究成果の概要 つづき

ることであると同時に、その差異（非類似性）をも認識する営みとして考えているという点である。動物の〈ふり〉をするということは、動物について知るのみならず、自分自身について知ること、つまり、自己認識にとっても極めて重要な契機となりうるという見方が共有されている。なお、シェパードや矢野と同じく、冒頭で言及した桜井・小野・山折・宮家（1974, p. 69）でも、人間が他の人間や人間以外の存在に〈変身〉するという考え方の根底には、「強烈な生の連帯感と一方では異種間のきびしい断絶感」があると述べられており、〈変身〉が「連続性」と「他者性」という相反する概念をともに含む出来事であることが分かる。

また、動物の模倣に関する先行研究を検討していく過程で、動物に限らず、何かの〈ふり〉をするということそのものが、人間の成長や他者理解の能力を培う上でも非常に重要な意味をもつということが明らかになった（矢野, 2006 など）。これを踏まえ、さらに調査を進めた結果、三浦（2001）、中沢（2002）、坂部（2007, 2008）など、文学批評、文化人類学、哲学の領域においても、模倣——特に動物を真似ること——が、ヒトに「自己」および「社会」や「共同体」を「発見」させ、人類の進化に極めて大きな飛躍をもたらす契機となったと考えられていることが分かった。

こうして、領域横断的な文献調査を行った結果、動物への〈変身〉という「コミュニケーション」は、さまざまな学知で考察の対象とされ、人間とは何かや、人間と動物との関係性を問う上で極めて重要なテーマとなっていることが判明した。

### 3. まとめ

前章で述べたように、本研究は、文学、歴史学、哲学、文化人類学の知見を参照し、〈変身〉に関する先行研究を、①動物変身譚の研究、②動物の〈模倣〉の研究の二つに整理・分類した。その結果、動物への〈変身〉は、人間の振る舞いや有り様をメタフォリカルに理解する手段としての側面をもつとともに、自己認識や自然との類似性／異質性を認識することを可能にする事象であることが明らかとなった。

そして、これらの知見をもとに、2012年8月に行われた ASLE-Japan／文学・環境学会の全国大会にて、現代日本を代表する環境文学作家（ネイチャーライター）である梨木香歩と加藤幸子の作品を、坂部恵（2008）の〈かたり〉についての思索と、環境文学研究の鍵概念の一つである「自然の他者性」を手がかりに分析した。この発表では、近年の環境文学研究では、自然を人間と「コミュニケーション」する〈主体〉として捉えることの意義とその困難について考察することが主要な研究課題の一つとされていることを踏まえ（野田, 2011）、人間が動物の「ふり」をするという行為のもつ多様な意味を考察し、「ふり」としての〈変身〉や動物を「擬人化」することが、本来理解不可能なはずの「他者」である動物を人間にとって理解可能な存在に回収する「人間中心主義」的なふるまいであるだけでなく、人間が動物と「なり」、その〈ことば〉を〈かたる〉ことによって人間中心主義的な発想を相対化する契機となりうることを論じた。

現在は、先行研究の整理の整理に加え、〈変身〉をテーマとする古典的な文学作品（中島敦「山月記」、フランツ・カフカ「変身」、デイヴィッド・ガーネット『狐になった奥様』、アプレイウス『黄金のろば』、オウィディウス『変身物語』など）の分析も行いながら、〈変身〉を批評の鍵概念として環境文学作品を分析し、〈変身〉に着目して文学作品を研究する方法論の構築を目指している。また、人間の動物への〈変身〉とは、動物の「他者性」を奪う／無視することともなりうるが、その一方で、人間と動物という二者が、「差異」と「同一性」のせめぎ合いの中で「照応」し、〈人間が人間であると同時に動物でもある〉という「関係」を構築することでもあるという本研究の結論の妥当性を検討しながら、梨木香歩の文学テクストを分析し、本研究の成果を公表する準備を進めている。

### 参考文献

- 三浦雅士（2001）.『批評という鬱』岩波書店。  
 野田研一（2010）.「〈風景以前〉の発見、もしくは「人間化」と「世界化」」『水声通信』第33号, 116-128頁. 水声社。  
 野田研一（2011）.「自然という他者——声と主体のゆくえ」渡辺憲司・野田研一・小峯和明・ハルオ・シラネ（編）『環境という視座：日本文学とエコクリティシズム』（4-12頁）. 勉誠出版。  
 中沢新一（2002）.『熊から王へ カイエ・ソバージュII』講談社。  
 坂部恵（2007）.「仮面の解釈学——時と影のたわむれ——」『坂部恵集3』（121-138頁）. 岩波書店。  
 坂部恵（2008）.『かたり：物語の文法』筑摩書房。  
 桜井徳太郎・小野泰博・山折哲雄・宮家準（1974）.『変身 ふおるく叢書3』弘文堂。  
 矢野智司（2006）.『意味が躍動する生とは何か——遊ぶ子どもの人間学』世織書房。

※この（様式2）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（A4縦型横書き1枚・自由様式）を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①なし

<投稿を予定している学術雑誌>

- ・『異文化コミュニケーション論集』立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科 (第12号, 2014)
- ・『文学と環境』ASLE-Japan/文学・環境学会 (第16号, 2014)

②なし

③なし

④

<学会発表>

2012年度 ASLE-Japan/文学・環境学会全国大会 研究発表 (2012年8月31日、於：近畿大学)

【発表題目】「動物の〈かたり〉：〈語る〉ことと〈騙る〉こと」

<研究発表が決定している学会>

- ・立教・異文化コミュニケーション学会 第10回大会 研究発表 (2013年6月1日、於：立教大学)
- 【発表題目】「〈交感〉のなかの〈変身〉——梨木香歩『蟹塚縁起』の分析を通して——」